

年少者日本語教育における学習のネットワーク、 及び指導に関する教師の意志決定全体の属性的特徴

岡崎 敏雄

1. はじめに

前稿までに、教科指導および日本語・母語学習指導基準のありように対する評定が年少者日本語教育に関わる学校や教師の属性別にどのような特徴を示すかに注目して分析してきた。本稿はこれら年少者の学校および家庭を含む地域社会のネットワークを構成する父母・地域の母國の人たち・日本人の子供・外国人の仲間・学校の専門カウンセラーに関する教師の意志決定に関して属性別にどのような特徴が示されるかを見る。その上でこれまで分析してきた教科および日本語・母語学習指導基準と本稿でのネットワークに対する意志決定全体に注目し、意志決定全体の傾向を担う教師の属性的特徴がどのようなものであるかを見る。これによって、全体としては「円滑受容優先・具体的指導途上型」の傾向を持ち、その上で「少数散在型」「滞在適応重視型」「滞在エンジョイ型」「短期滞在者への注目型」「現行制度枠内一部現行制度超克型」という性格を具えている日本における年少者言語教育に関わる教師の意志決定の特徴をどのような教師層が主として担っているかを見るものである。

2. 学習のネットワークに関する意志決定

以下意志決定のそれぞれのカテゴリーの下位項目について、それぞれの項目を目的変数とし属性（例　学校の外国人年少者数、外国人年少者の母語、教師個人の経験、父母の意向など）を説明変数として、重回帰分析を行ない、属性の影響度ならびに説明変数としての重要度順位を見た。これにより各意志決定項目ごとにどのような属性が、どのような重要度の順で意志決定に寄与するのかを明らかにする。

以下の意志決定項目は分散比はいずれも有意となっており（有意水準 P>

0.01), 各目的変数に対するこれらの説明変数間における相対的な重要度の順位は、有意水準のF値を比較することによって判定される。¹⁾

(1) 外国人・日本人の親の交流行事

重回帰分析の結果、以下が明らかとなった。

目的変数

「1-46 外国人年少者の親と日本人の子供の親との交流の場となる行事を積極的に行なう」

決定係数：0.05、自由度修正済み決定係数：0.05

説明変数1

父母との懇談経験 ($F=54.04278$, 有意差：あり ($P<0.01^{**}$))

評定平均値：殆どない：4.97, 1時間程度の懇談経験：5.06, それ以上の経験がある：5.30

ポン・フェローニ多重比較の結果：いずれも有意差あり。「1時間程度の懇談経験」と「殆どない」の間 ($P<0.05^*$), それ以外 ($P<0.01^{**}$)

説明変数2

小・中学校の区別 ($F=24.55164$, 有意差：あり ($P<0.01^{**}$))

評定平均値：小学校：5.14, 中学校：5.00, 有意差：あり ($P<0.01^{**}$)

説明変数3

教師・講師の経験年数 ($F=19.45787$, 有意差：あり ($P<0.01^{**}$))

評定平均値：1-4年：5.28, 5-10年：5.08, 10年以上：5.08

ポン・フェローニ多重比較の結果：「5-10年」と「10年以上」の間を除き、有意差あり ($P<0.01^{**}$)

説明変数4

教員の加配 ($F=13.03125$, 有意差：あり ($P<0.01^{**}$))

評定平均値：加配あり：5.22, なし：5.04, 有意差：あり ($P<0.01^{**}$)

以上により、「外国人・日本人の親の交流行事」に影響を与える教師の属性

として4つがあり、影響度の大きい順にそれぞれ1. 父母との懇談経験が多いほど、2. 小学校の教員は中学校の教員よりも、3. 教師・講師の経験年数が5年以上の教師は4年以下の教師よりも、また、4. 加配のある学校的教師はない学校的教師よりもこの意志決定に高い評定値を与えていていることが明らかとなった。

意志決定「母語の歌・遊び・考え方を日本人の子供に経験させる機会と考える」とほぼ同じ評定傾向が示されている点が注目される。またその中でも、教師・講師の経験年数や教員の加配の有無が影響を与える属性として上がっていること、および経験年数の場合、5年以上と4年以下に一つの分岐点があることが注目される。

(2) 日本語使用・学習の薦め

重回帰分析の結果、以下が明らかとなった。

目的変数

「1-47 日本語を使うことに抵抗のある子供の場合、多少無理をしても使わせるよう努力する」

決定係数：0.02、自由度修正済み決定係数：0.02

説明変数1

教師・講師の経験年数 ($F = 26.49913$ 、有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：1-4年：4.11、5-10年：3.89、10年以上：3.88

ボン・フェローニ多重比較の結果：「5-10年」と「10年以上」の間を除き、有意差あり ($P < 0.01^{**}$)

説明変数2

学校全体の外国人年少者数 ($F = 25.96852$ 、有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：1人：4.02、2-4人：3.88、5-9人：3.86、10-19人：3.94、20-29人：4.09、30人以上：4.01

ボン・フェローニ多重比較の結果：1人と2-4人、1人と5-9人、5-9人と20-29人の間有意差あり。 $(P < 0.01^{**})$

2-4人と20-29人の間で有意差あり ($P < 0.05^*$)

説明変数 3

小・中学校の区別 ($F=11.77983$, 有意差：あり ($P<0.01^{**}$))

評定平均値：小学校：3.88, 中学校：4.01, 有意差：あり ($P<0.01^{**}$)

目的変数

「1~48 親が日本語の学習はそれほど必要でないという考え方の場合、日本語学習の必要性を説くようとする」

決定係数：0.03, 自由度修正済み決定係数：0.03

説明変数 1

教師・講師の経験年数 ($F=34.3418$, 有意差：あり ($P<0.01^{**}$))

評定平均値：1~4 年：4.62, 5~10 年：4.39, 10 年以上：4.31

ポン・フェローニ多重比較の結果：いずれも有意差あり

「5~10 年」と「10 年以上」の間、有意差あり ($P<0.05^*$), 他はすべて ($P<0.01^{**}$)

説明変数 2

取り出し指導の有無 ($F=13.95639$, 有意差：あり ($P<0.01^{**}$))

評定平均値：取り出し指導あり：4.41, なし：4.25, 有意差：あり ($P<0.01^{**}$)

「日本語使用・学習の薦め」の意志決定に関して、「1~47 日本語を使うことに抵抗のある子供の場合、多少無理をしても使わせるよう努力する」に影響を与えていたる教師の属性として以下の 3 つがあり、影響度の大きい順にそれぞれ
 1. 教師・講師の経験年数でこれまでの項目でたびたび上がってきてている経験年数が 5 年以上の場合は 4 年以下の場合よりも、
 2. 所属している学校全体の外国人年少者数が 1 人と 2 ~ 9 人の場合には 1 人の場合の教員の方が、2 ~ 9 人と 20 ~ 29 人の間では 20 ~ 29 人の場合の教員の方が、また、
 3. 中学校の教員は小学校の教員よりもこの意志決定に高い評定値を与えていたことが明らかとなった。

「1~48 親が日本語の学習はそれほど必要でないという考え方の場合、日本語学習の必要性を説くようとする」の意志決定に影響を与えていたる教師の属性

として以下の4つがあり、影響度の大きい順にそれぞれ1. 教師・講師の経験年数が少なければ少ないほど、2. 学校として取り出し教室を置いている学校の教師は置いていない学校の教師よりも、3. 所属している学校全体の外国人年少者数が30人以上ある学校的教師は、30人未満の学校的教師よりも、また、4. 教師としての立場のうち、日本語担任の教師はクラス担任の教師よりもこの意志決定に高い評定値を与えていたことが明らかとなった。

以上のうち、教師・講師の経験年数および学校全体の外国人年少者数が共通して影響を与える属性として上がっていることが注目される。

(3) 母国人との交流評価

重回帰分析により、以下が明らかとなった。

目的変数

「1-49 外国人年少者が母國の人と積極的に交流することは望ましいことである」

決定係数：0.02、自由度修正済み決定係数：0.02

説明変数1

小・中学校の区別 ($F = 26.59477$ 、有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：小学校：5.50、中学校：5.55、有意差：あり ($P < 0.01^{**}$)

説明変数2

父母との懇談経験 ($F = 21.41627$ 、有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：殆どない：5.39、1時間程度の懇談経験：5.46、それ以上の経験がある：5.59

ボン・フェローニ多重比較の結果、「殆どない」と「1時間程度の懇談経験」との間、有意差あり ($P < 0.05^*$)、その他有意 ($P < 0.01^{**}$)

説明変数3

外国人年少者指導のための研修の受講 ($F = 15.22274$ 、有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：研修経験あり：5.72、なし：5.44、有意差：あり ($P < 0.01^{**}$)

説明変数4

これまで指導した外国人年少者数 ($F=14.51664$, 有意差:あり ($P<0.01^{**}$))

評定平均値: 1人: 5.44, 2~4人: 5.45, 5~9人: 5.64, 10人以上: 5.71
 ボン・フェローニ多重比較の結果: 1人と2~4人, 5~9人と10人以上の間を除き, 有意差あり ($P<0.01^{**}$)

以上により、「母国人との交流を高く評価する」の意志決定に影響を与えていた教師の属性として以下の4つが上がっており、影響度の大きい順にそれぞれ1. 中学校の教員は小学校の教員よりも、2. 懇談経験が長ければ長いほど、3. 外国人年少者に対する指導研修の受講経験のある場合はない場合よりも、また、4. これまで指導した外国人年少者数が1人と2~4人, 5~9人と10人以上の間で差がない場合を除き、年少者数が多いほどこの意志決定に高い評定をすることが明らかとなった。

このうち中学校の教員が小学校の教員よりも高く評定していることが注目に値する。他の3つの属性については父母との接触あるいは年少者そのものとの接触経験が深まれば深まるほど、また、指導のための研修によって、認識が形成されている点もまた、留意すべき点としてある。

(4) 外国人年少者の日本人の子供にとっての価値

重回帰分析の結果、以下が明らかとなった。

目的変数

「1~50 外国人年少者がクラスにいることは、日本人の子供にとって極めてかけがえのない経験をさせることになる」

決定係数: 0.06, 自由度修正済み決定係数: 0.05

説明変数1

小・中学校の区別 ($F=134.4728$, 有意差:あり ($P<0.01^{**}$))

評定平均値: 小学校: 6.08, 中学校: 5.79, 有意差:あり ($P<0.01^{**}$)

説明変数 2

父母との懇談経験 ($F = 46.33036$, 有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：殆どない：5.83, 1時間程度の懇談経験：5.99, それ以上の経験がある：6.17

ボン・フェローニ多重比較の結果：いずれも有意差あり ($P < 0.01^{**}$)

説明変数 3

外国語学習経験 ($F = 20.51452$, 有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：日常会話ができる外国語がある：6.21, ない：5.96, 有意差：あり ($P < 0.01^{**}$)

説明変数 4

外国人年少者指導のための研修の受講 ($F = 20.08412$, 有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：研修受講経験あり：6.24, なし：5.96, 有意差：あり ($P < 0.01^{**}$)

以上により、「外国人年少者の日本人の子供にとっての価値」の意志決定に影響を与えていた教師の属性として以下の4つがあり、影響度の大きい順にそれぞれ1. 小学校の教員は中学校の教員よりも、2. 父母との懇談経験が多いほど、3. 外国語学習経験では、日常会話のできる外国語がある場合はない場合よりも、また、4. 外国人年少者に対する指導研修の受講経験のある場合はない場合よりもこの意志決定に高い評定値を与えていたことが明らかとなった。

外国人年少者が日本人の子供にとってかけがえのない経験をさせるという認識において、中学校になるにつれて教師の側で評定が低くなっていくこと、また、指導研修の受講経験が影響を与えるものの一つとして上がっていることが注目に値する。また、外国人の父母との懇談経験が日本人の子供にとっての外国人年少者の価値の評定に影響を与えていたことも予測になかったという点で興味深い。

(5) 日本人の子供に対する外国人年少者との相違の認識の教育

重回帰分析の結果、以下が明らかとなった。

目的変数

「1-51 クラスの日本人の子供に対して、外国人の年少者と日本人の子供が違う点もあることをよく理解させるよう努める」

決定係数：0.03、自由度修正済み決定係数：0.02

説明変数 1

父母との懇談経験 ($F = 29.91005$ 、有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：殆どない：5.79、1時間程度の懇談経験：5.89、それ以上の経験がある：6.07

ポン・フェローニ多重比較の結果：いずれも有意差あり ($P < 0.01^{**}$)

説明変数 2

外国語学習経験 ($F = 19.27785$ 、有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：日常会話ができる外国語がある：6.15、ない：5.88、有意差：あり ($P < 0.01^{**}$)

説明変数 3

小・中学校の区別 ($F = 15.74813$ 、有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：小学校：5.91、中学校：6.03、有意差：あり ($P < 0.01^{**}$)

以上により、「日本人の子供に対する外国人年少者との相違の認識の教育」の意志決定に影響を与えていた教員の属性として以下の3つがあり、影響度の大きい順にそれぞれ1. 父母との懇談経験については、懇談経験の長い教員であればあるほど、2. 外国語学習経験では、日常会話ができる外国語のある教員はない教員よりも、また、3. 中学校の教員は小学校の教員よりもこの意志決定に高い評定値を与えていたことが明らかとなった。

ここでも父母との懇談経験がこの意志決定に影響を与えていたことが予測に登っていなかったことでもあって興味深い。また、中学校の教員の方が小学校の教員よりもこのような努力を必要とするとしている点は、「持ち物・服装・習慣への柔軟な対応」という意志決定について、小学校の教員の方が中学校の教

員よりもかなり高い評定をしていたのと併せて考えた場合、学校生活での規則などが中学の方が比較的重視される点からこのような結果になっていると考えられる点もある。

(6) 専門カウンセラーの必要性

重回帰分析の結果、以下が明らかとなった。

目的変数

「1-52 外国人年少者の指導には専門のカウンセラーの助言が不可欠である」

決定係数：0.04、自由度修正済み決定係数：0.03

説明変数 1

小・中学校の区別 ($F = 32.76792$, 有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：小学校：5.20, 中学校：5.45, 有意差：あり ($P < 0.01^{**}$)

説明変数 2

父母の職業 ($F = 28.2807$, 有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

重回帰分析のための数値配置：工場・建設業等労働者：1, 留学生・研究者：2

評定平均値：工場・建設業等労働者：5.34, 留学生・研究者：4.91, あり ($P < 0.01^{**}$)

説明変数 3

取り出し指導の有無 ($F = 23.96175$, 有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：取り出し指導あり：5.31, なし：5.14, 有意差：あり ($P < 0.01^{**}$)

説明変数 4

教師・講師の経験年数 ($F = 20.23378$, 有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：1-4 年：5.15, 5-10 年：5.26, 10 年以上：5.29

ボン・フェローニ多重比較の結果：「1-4 年」と「10 年以上」の間で有意差あり ($P < 0.01^{**}$)

以上により、「専門カウンセラーの必要性」の意志決定に影響を与える属性として以下の4つがあり、影響度の大きい順にそれぞれ1. 中学校の教員は小学校の教員よりも、2. 担当している外国人年少者の父母の職業が工場・建設業等労働者の親の場合には、留学生・研究者の親の場合よりも、3. 学校として取り出し教室を設定している学校の教師は設定していない学校の教師よりも、4. 教師・講師の経験年数が10年以上の教師は4年以下の教師よりも高い評定値を与えることが明らかとなった。

(7) 仲間作りのための取り出し教室

重回帰分析の結果、以下が明らかとなった。

目的変数

「1-53 忠春期の外国人年少者の場合、仲間作りのために、取り出しクラスに入れることがある」

決定係数：0.02、自由度修正済み決定係数：0.01

説明変数1

教師の年齢 ($F = 12.97675$ 、有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：20代：4.47、30代：4.53、40代：4.55、50代以上：4.59

ボン・フェローニ多重比較の結果：20代と30代の間にのみ有意差あり ($P < 0.05^*$)

説明変数2

家庭での使用言語 ($F = 11.17897$ 、有意差：あり ($P < 0.01^{**}$))

評定平均値：母語を使うようにしている：4.59、日本語を使うようにしている：4.48、特にどちらでもない：4.52

ボン・フェローニ多重比較の結果：「母語を使うようにしている」と「日本語を使うようにしている」の間に有意差あり ($P < 0.05^*$)、他はいずれも有意差なし。

以上により、「仲間作りのための取り出し教室の必要性」の意志決定については、2つの属性が影響を与えており、影響度の大きい順にそれぞれ1. 教師の年齢が30代の場合は20代の教員よりも、また、2. 家庭での使用言語が母語

を使うようにしている家庭の担当の教育は、日本語を使うようにしている家庭の担当の教員よりもこの意志決定に高く評定を与えていることが明らかとされた。

3. 意志決定全体の傾向を担う教師の属性上の特徴

(1) 意志決定全体の傾向

年少者日本語教育に当たる教師の意志決定は、次のような傾向を持つものであった（岡崎 2002a）。

第1に、全体の意志決定のカテゴリー上の特徴が「円滑受容優先」の性格を持っていること、「母語考慮、母語学習支援」などの傾向を示している点から見て、言語教育観の場合と同様、民族グループ間の交流が対立的性格を持つに至る経験が少なく、マジョリティがマイノリティの言語や文化に対して見る見方が比較的好意的である傾向から「少数散在型の意志決定」傾向が形成され、言語教育観と同様、アメリカ合衆国のようなグループ間の相克型意志決定ではなく、「受容型意志決定」傾向が形成されていると思われる。

第2に、言語教育観の様相と異なった点として、「受容型」の傾向を示す一方で「日本人の態度・行動に対する同化を求める」傾向も半数の教師によって肯定される様相を示している。ただしこの同化は「一辺倒型同化」のような強い同化を求めるタイプのものではなく、同時に「母語考慮型」「母語学習支援型」などの傾向を併せ持つ「併存型同化」の性格のものである。この点からすれば、はっきりと同化という形が前面に出ているという点で言語教育観で見られなかった傾向とはいうものの、言語教育観で母語保持と共に日本語学習を併行的に重視するという全体の傾向に着目すれば、意志決定においても母語に対する考慮、母語学習の支援と同化が併存しているという傾向を一面で対応しているということもできよう。

第3に、言語教育観と同様、「能力養成重視型」に対して、「滞在エンジョイ重視型」の意志決定傾向が見られた。これを上で見た同化への要求が「併存的同化型」の性格で、「一辺倒型同化」の性格のものでないことを併せて考えると、一辺倒型同化ではないが故に持ち物・服裝・習慣に対する柔軟な姿勢によって強制的な同化が緩和され、滞在エンジョイ重視型に結びつきやすく、同様に一辺倒型同化のような強い同化ではないために日本語能力の養成の重視型傾向の意志決定よりも滞在エンジョイ重視型の傾向になりやすい背景があると言

えよう。

第4に、言語教育観で長期観察を要するものが形成されていなかった点に対応することとして、意志決定の場合には教師全体が未だ指導方法や決定基準を手探りで行なっており、確固としたものがまだないことから指導の具体的な場面に関わる意志決定については高い評定値が与えられておらず、「具体的指導途上型」意志決定の傾向が見られる。

第5に、指導の具体的な場面に関わる意志決定の全体としては、言語教育観で見られたのと同様、「現行制度枠内型」のものが高い評価を得ている。ただし母語の支援の態様に限っては、現行制度の枠内では実施されていない「母語ができる人をきちんと教員として採用し、教えてもらうことが望ましい」の意志決定が高い評定平均値を示しており、一部現行制度を超える意志決定が「望ましい」とする傾向も含まれている点が言語教育観と異なっている。

以上により、全体としては「円滑受容優先・具体的指導途上型」の意志決定傾向が示された。

その上で、「少数散在型」「滞在適応重視型」「滞在エンジョイ型」「短期滞在者への注目型」「現行制度枠内一部現行制度超克型」という性格を備えたものであることが示された。

(2) 意志決定全体の傾向を担う教師の属性的特徴

以下ではこのような傾向を主に担っているのはどのような属性の教師であるかを、これまで意志決定のカテゴリー毎に見てきた意志決定に与えるより程度の大きい属性の分析結果を基にとらえ返していく。また特に、突出して担っている層のないカテゴリーについて教師全体と際立って異なった傾向を示している属性がある場合はその教師層を見ていく。

第1に、意志決定に関する質問項目全53項目を27のカテゴリーに分けてみた場合、評定平均値5を超える、評定平均値順位で1～18位のものについて見ると、上位1～5位に挙がったものでは、「24. 外国人年少者の日本人の子供にとっての価値」「25. 日本人の子供に対する外国人年少者との相違の認識の教育」「1. 取り出し教室の性格」「23. 母國人ととの交流の評価」「20. 母語の歌・遊び・考え方の経験の機会」など、「日本の学校において外国人の子供をどう受け止め、それをどう認識するか、また外国人の子供たちをどのように円滑に日本の教室に入れて来れるように受け入れるか」に関わるカテゴリーが集中している。また6～18位のほとんどについても同様である。

これに対して、実際の「指導の具体的な場面に関わる意志決定のカテゴリー」つまり「1. 取り出し授業の性格決定」「2. 取り出し教室の期間決定基準」「5. 学級編成上の決定基準」「6. 指導内容の決定基準」「9. 管理学習の必要性」「7. 日本語4技能の指導の決定基準」については上位1~18位には入っておらず、高い評定値が与えられていない。以上により、日本の教師の意志決定は全体として、「円滑受容優先・具体的指導途上型」の傾向を持っている。

ではこの傾向を主に担っているのはどのような属性の教師層であろうか。「24. 外国人年少者の日本人の子供にとっての価値」「25. 日本人の子供に対する外国人年少者との相違の認識の教育」の意志決定に影響を与えていた代表的属性は、前者で、1. 小学校、2. 父母との懇談経験が多い教師であり、後者で、1. 父母との懇談経験が多い、2. 日常会話のできる外国語のある教師であった。すなわち全体の中でも特にこれらの教師層が「円滑受容優先の具体的途上型」の傾向を強く持っていると言える。

第2に、「1. 取り出し教室の性格決定」や「2. 取り出し期間の決定基準」のカテゴリーの意志決定では、取り出しクラスの目的として学校生活全般への適応の日本語指導の方が、在籍学級について行くための日本語指導よりも高い評価が与えられ、取り出し期間の決定基準も在籍学級での生活での早い適応が目指され、日本語の日常会話に支障がないからと言って取り出しあは止めないとする傾向、また在籍学級での授業について行けるようになった後でも外国人年少者が集まる時間や場を設定することに高い評定が与えられるに現われているように、「(日本語)能力養成重視型」というよりは「滞在適応重視型」の意志決定傾向が見られる。これら「1. 取り出し教室の性格決定」「2. 取り出し期間の決定基準」の意志決定に影響を与えていた代表的属性は、前者で年齢の高い教師、後者で取り出し教室を設置していない学校の教師で、これらが「滞在適応重視型」の傾向を強く持っていると言える。(後者の「取り出し教室を設置していない学校の教師」は、自分の所属する学校には取り出し教室はないが、かつての所属校での経験や他の設置校の実状の見聞をもとにこのような傾向の意志決定をすると答えていた。)

第3に、「6. 指導内容の決定基準」「8. 教科書選定の基準」のカテゴリーの意志決定では、年少者の今後の滞在予定期間や永住予定か否かという点が指導内容を考えるに当たって考慮される度合いが低く、子供の進学や就職を含めた将来的な展望よりも現時点での能力や適応状況などの方がより注目されている。また、日本人の子供と全く同じ内容を学習しなければならないと考えなく

てもよいのではないかという視点から教科書の選定がなされていることが示されている。これらから言語教育観と同様に、「短期滞在者への注目型」の意志決定傾向が示されている。

同様に「9. 漢字学習の必要性」に関して、半数を超える教師が日本人と同程度にまで漢字学習を行なう必要はないと考えている点に「短期滞在者への注目型」の意志決定傾向が見られる。

「6. 指導内容の決定基準」「8. 教科書選定の基準」の意志決定に影響を与えていた代表的属性は、いずれも若い世代の教師および外国人年少者の対する指導研修の受講経験のある教師であり、また「9. 漢字学習の必要性」については中学校教師が特に「短期滞在性への注目型」の意志決定傾向を強く持っていると言える。

第4に、「10. 母国文化・母語の教室での活用」で極めて多くの教師が授業中に母国に関係することを取り出すことを高く評価し、同じ母語の子供同士で話し合うことをプラスとして捉え、学校内で日本語を使うよう休み時間に同じ母語の子供で困らないような配慮をしないこと、また「11. 子供の母語に対する教師の姿勢」として教師が外国人年少者の母語を学習することやカタコトでも子供の母語を使って見ようとする努力を示すことなどに見られるような「母語考慮型」意志決定傾向が示されている。この傾向を特に強く持っている出した教師層ではなく、教師全体に偏りなくこの傾向は示されている。

第5に、「13. 日本人の態度・行動への同化」は肯定的評定率が48. 2あり、ほぼ半数近くの教師が肯定的な評定を下している。これを「10. 母国文化・母語の活用」「11. 子供の母語への教師の姿勢」「12. 学習能力向上のための日本語・母語両言語学習の必要性」の3つのカテゴリーにおいて、母語や母国文化を尊重し、その学習の必要性を認めることに対して高い評定を与え、さらに「14. 持ち物・服装・習慣に対する柔軟な対応」や「16. 学校での母語支援への態様」などで高い評定が与えられている傾向と併せて捉えた場合、「併存型同化」の性格の意志決定が示されている。

これを先に述べた「母語考慮型」と関係づけてみた場合には、意志決定が「同化併存的母語考慮型」意志決定の性格を持っていることも同時に示されている。この傾向についても特に突出して強くこれを示している教師層ではなく、教師全体に偏りなくこの傾向は見られると言える。

第6に、「15. 日本滞在中の重視内容」について肯定的評定率が「楽しく過ごし、楽しかった思い出を持って帰国してもらうことを重要視する」が63. 4%

であるのに対して、「学力や他の能力を伸ばすことを重視する」が28.2%であるという大差が見られ、言語教育観と同様「滞在エンジョイ型」意志決定傾向が見られる。また「19. 家庭学習への対応」について、外国人年少者が日本で教科学習上大きな問題を抱えていることが指摘されているにもかかわらず、家庭で父母が勉強を見るように教師が依頼するという項目では肯定、否定いずれも突出した傾向を示さず、むしろ中間的評定率が高く、必ずしも家庭学習を強く依頼するという傾向が出ていないことから同様に「滞在エンジョイ型」の意志決定傾向がここにも見られる。「15. 日本滞在中の重視内容」「19. 家庭学習への対応」の意志決定に影響を与える代表的な属性は、前者で経験年数4年以下の教師、全体としては家庭学習を強く依頼するという傾向が弱い中でも指導した外国人年少者数が10人以上の教師の場合は、家庭で父母が勉強を見るように依頼する傾向が強いことが示されている。この点からすると、経験年数が少ない教師の場合には「楽しく過ごし、楽しかった思い出を持って帰国してもらうことを重視する」のに対して、外国人年少者との接触が多い場合にはこのような「滞在エンジョイ型」の傾向がいくらか弱く、「学力や他の能力を伸ばすことを見重視することへの危機感が多くなっている」という様相を示している。

第7に、「16. 学校での母語支援の態様」においてボランティア形式の母語支援よりも母語ができる人物を教員として採用するという形式が高い評定平均値を示しており、「母語支援重視型」と言える傾向が示されている。「16. 学校での母語支援の態様」より詳しく言うと、「母語が話せる人が外国人年少者の指導に関わるようにする、また母語ができる人をきちんと教員として採用し、教えてもらうことが望ましい」と考える教師の代表的属性は、学校で取り出しが教室内を設定している場合の教師で、担当している外国人年少者の親の職業が工場・建設業等労働者の場合に、留学生や研修者の親を担当している場合よりも、また中学校の教員は小学校の教員よりも強く持っていると言える。

第8に、「18. 家庭使用言語への対応」の意志決定カテゴリーについて「外国人年少者が家庭で母語／日本語をどの程度使っているかを把握することに努める」という項目で80%近い肯定的評定率があるものの、それを把握した上で具体的に親や子供に対してどのように指導するかについては「家庭でもできるだけ多く日本語を使うように父母に依頼する」や「家庭では母語で会話するように父母に依頼する」のいずれについても肯定的評定率は余り高くなく、明確な傾向が示されていない。これはアメリカ合衆国において言語ミスマッチの言語教育観や最大限接觸の言語教育観が高く評価され、家庭でも受け入れ先の言

語である英語を使うよう強く勧める傾向があったことは対照的に、日本では言語教育観が意志決定にそれほど強く結びつかない「言語教育観と意志決定の乖離傾向」も一部に見られる。全体としてこのような乖離傾向が見られる中で、家庭では母語で会話するように父母に依頼する傾向の強い教師として、これまで指導してきた外国人年少者の数が多い教師、また家庭でもできるだけ多く日本語を使うよう父母に依頼する傾向の強いのは、教師・講師の経験年数が4年以下の教師の場合であることが示されている。

注

- † 以下、全体として各属性が目的変数に与える影響は緩やかなものである（全体として決定係数が小さい）ことを前提とした資料として提出する。

参考文献

- 岡崎敏雄 (1995) 「年少者言語教育研究の再構成」『日本語教育』Vol. 86, pp. 1-12
 ——— (1996) 「応用言語学の課題（1）：年少者言語教育研究の再構成—社会・文化的視点から—」『筑波応用言語学』Vol. 3, pp. 1-12
 ——— (1997) 「応用言語学の課題（2）：年少者言語教育研究の再構成—社会・文化的視点から再考—」『筑波応用言語学』Vol. 4, pp. 1-12
 ——— (1998) 「応用言語学研究（1）：年少者日本語教育と母語保持研究（1）」『筑波大学文藝・言語研究・言語編』Vol. 34, pp. 157-175
 ——— (1999) 「応用言語学研究（2）：年少者日本語教育と母語保持研究（2）」『筑波大学文藝・言語研究・言語編』Vol. 36, pp. 51-67
 ——— (2000) 「年少者日本語教育にかかる教師の属性による言語教育観の違いの分析（2）」『筑波大学文藝言語研究・言語編』Vol. 38, pp. 17-42
 ——— (2001a) 「年少者日本語教育にかかる教師の意志決定の研究」『筑波大学文藝言語研究・言語編』Vol. 39, pp. 31-44
 ——— (2001b) 「年少者日本語教育にかかる教師の指導基準」『筑波大学文藝言語研究・言語編』Vol. 40, pp. 27-39
 ——— (2002a) 「年少者日本語教育における意志決定のパターンの分析」『筑波大学文藝言語研究・言語編』Vol. 41, pp. 43-55
 ——— (2002b) 「年少者日本語教育における指導基準の教師の属性による特徴の分析」『筑波大学文藝言語研究・言語編』Vol. 42, pp. 125-137
 ——— (2003a) 「年少者日本語教育における教科指導基準の教師の属性による特徴の分析」『筑波大学文藝言語研究・言語編』Vol. 43, pp. 8-20
 ——— (2003b) 「年少者日本語教育における日本語・母語学習指導基準の教師の属性による特徴の分析」『筑波大学文藝言語研究・言語編』Vol. 44, pp. 1-17
 岡崎敏雄・西川寿美 (1993) 「学習者とのやりとりを通した教師の成長」『日本語学』Vol. 2, No. 3, pp. 31-41, 明治書院

- 塙地満美子 (1995) 『外国人年少者日本語教師の言語教育観、意思決定と判断』筑波大学大学院地域研究研究科修士論文
西原鈴子編 (1994) 『在日外国人と日本人の言語接触における相互理解メカニズム』 国立国語研究所
箕浦康子 (1991) 『子供の異文化体験』 東京: 思索社

- Baker, C. 1993. *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism*. Clevedon, England : Multilingual Matters.
- Baker, K. & A. de Kanter. 1981. *Effectiveness of Bilingual Education*. U.S. Department of Education : Washington D.C.
- Beardmore, H. B. 1993. *European Models of Bilingual Education*. Clevedon, England : Multilingual Matters.
- Bhatnagar, J. 1980. Linguistic behaviour and adjustment of immigrant children in French and English schools in Montreal. *International Review of Applied Psychology* 29 : 141-58.
- Bruck, M., H. Jakimik and G. R. Tucker. 1976. Are French Programs suitable for working class children? In Engel, W. (ed.) *Prospects in child language*. Royal Vangorcum, Amsterdam.
- Carringer, D. C. 1974. Creative thinking abilities of Mexican youth. *Journal of Cross Cultural Psychology* 5 : 492-504.
- Clyne, M. 1991. Community Languages. *The Australian experiences*. Cambridge University Press.
- Cummins, J. 1978. Bilingualism and the development of metalinguistic awareness. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 9 (2) : 131-49.
- . 1980. The entry and exit fallacy in bilingual education. *NABE Journal* 4 : 25-60.
- . 1981 a. The role of primary language development in promoting educational success for language minority students. In California State Department of Education (Ed.) *Schooling and language minority students*. California State University.
- . 1981 b. Age on arrival and immigrant second language learning. *Applied Linguistics* 2 : 132-49.
- . 1982. *Interdependence and bicultural ambivalence*. National Clearinghouse for Bilingual Education, Rosslyn, Virginia.
- . 1987. Theory and policy in bilingual education. *Multicultural Education*. California educational research and innovation, OECD : Paris.
- . 1996. *Negotiating Identities : Education for empowerment in a diverse society*. Ontario, CA : California Association for Bilingual Education.
- and K. Nakajima. 1987. Age of arrival, length of residence, and interdependence of literacy skills among Japanese immigrant students. In B. Harley, P. Allen, J. Cummins, and M. Swain (eds.). *The development of bilingual proficiency : final report*. Toronto : Modern Language Center,

- O.I.S.E. [ED 291248].
- and Swain. 1986. *Bilingualism in Education*. London : Longman.
- Diaz, R. 1985. Bilingual cognitive development. *Child development* 56, 1376-88.
- Fishman J. 1976. *Bilingual Education*. Rowley, Mass. : Newbury House.
- Gardner, R. C. and W. E. Lambert. 1972. *Attitude and Motivation in Second Language Learning*. Newbury House, Rowley, Massachusetts.
- Gibson, M. A. and J. U. Ogbu. (ed.) 1991. *Minority Status and Schooling : A comparative study of immigrant and involuntary minorities*. New York : Garland Publishing.
- Harley, B., P. Allen, J. Cummins and M. Swain. 1990. *Development of Second Language Proficiency*. Cambridge University Press.
- Ianco-Worrall, A. 1972. Bilingualism and cognitive development. *Child Development* 43 : 1390-1400.
- Lambert, W. E. 1977. The effects of bilingualism on the individuals cognitive and sociocultural consequences. In Hornby, P. A. (ed.) *Bilingualism*. 15-27. Academic Press.
- Marshall, D. F. 1991. *Language Planning*. Focusschrift in honour of J. A. Fishman. John Benjamins.
- Morgan, G. 1996. An investigation into the achievement of African-Caribbean pupils. *Multicultural Teaching*, 14 : 2, 37-40.
- Ogbu, J. U. 1992. Understanding cultural diversity and learning. *Educational Researcher*, 21(8), 5-14 & 24.
- Okazaki. 1997 b. Japanese language education with the perspective of multilingual and multicultural symbiosis : paper presented at JSAA conference at Melbourn, Australia.
- Paulston, C. 1992. *Sociolinguistic Perspectives on Bilingual Education*. Clevedon, England : Multilingual Matters.
- Ramirez, J. D. 1992. Executive summary. *Bilingual Research Journal*, 16, 1-62.
- Rees, O. 1981. Mother tongue and English Project. In Commission for Racial Equality (ed.) *Mother tongue teaching report*. Bradford College.
- Reid, E. and H. Reich (eds.). 1992. *Breaking the Boundaries : Migrant workers' children in the EC*. Clevedon, England : Multilingual Matters.
- Romaine, S. 1993. *Bilingualism*. Blackwell.
- Skutnabb-Kangas, T. and T. Toukomaa. 1976. *Teaching migrant children's mother tongue and learning the language of the host country in the context of the sociocultural situation of the migrant family*. The Finnish National Commission for UNESCO, Helsinki.
- Spence, A. G., S. P. Mishra and S. Ghozeil. 1971. Home language and performance on standardized tests. *Elementary School Journal* 71 : 309-13.
- Swain, M. 1978. Home-school language learning issues and approaches. 238-51. Newbury House.
- Wong-Fillmore, L. 1983. The language learner as an individual. In Clarke M.

and J. Handscombe (Eds.), On *TESOL '82: Pacific perspective on language learning and teaching*. Washington D.C.: TESOL.